

誰もが本気で磨き合える学校づくりを目指して！

受験勉強の妙味

校長 笠井 賢治

前号で私は、次世代エネルギー確保のための研究プロジェクトを評して、「学ぶという行為そのものが快感だなんて、そんな幸せなことはない」と述べましたが、それと真逆に位置付けられる学習行為といえは、いわゆる「受験勉強」ということになるのでしょうか。

自らの教養を高めるとか、知的な快感を得るためにというのではなく、ただひたすら、入試に合格するためだけに事柄を暗記し、解き方のトレーニングに励む……。そんな味気ないイメージもあり、いつの時代にも若者たちを重苦しい気分させてきた「受験勉強」ですが、私は全く意味がないものとは思いません。

誤解のないようお断りしておきますが、私自身は「試験」という形で自分を評価されることが大の苦手な、これまでに経験してきたあらゆる「受験」において、自分の力を十分発揮できたと実感したことは、ただの一度もありません。また、いつも申し上げているように、外から強制される競争は、トータルとして人々の健全な成長を妨げますから、高度経済成長期の日本のような、また現在のアジア近隣国のような、過剰なまでの受験戦争や学歴崇拜は、まったくナンセンスで、断固改善すべしだと考えます。

それでも、私が「受験勉強」を全面否定しないのは、次のような理由によります。

私たちは、普段忙しすぎる？日常にかまけてしまって、自分の生きざまを振り返ったり、価値観を点検したりする機会をほとんど持ち得ません。イライラを募らせたり、違和感を抱いたりしながらも、本気で自分と向き合って本質を見極めることをせず、とりあえず、周りのせいにして（あるいは逆にすべてを自分で背負いこんで）、済ましてしまいます。

でも、さすがに「自分の進路」を決めるということになれば、まともに自分と向き合わざるを得ません。さらにその実現のためには、味気ない「受験勉強」を、一定期間し続けなければならないのです。その間、「自分は最後まで頑張りきれぬのか」「自分の選んだ進路は間違っていないのか」という葛藤が、ずっとついてまわります。うまく納得できれば知らぬ間に「勉強」に没頭するのですが、なかなかそうはいかないのがヒトの常です。

15歳で多分初めて味わう「徹底的に自分と向き合う時間」……これを、「独りぼっち」で経験せずに済むのが、「受験勉強の妙味」です。3年生！ みんなで一緒に頑張るぞっ！